

(二〇一五年度)

6 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は23ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

数学はどのような科学であろうか。

¹ まず最初にあげるべきはその普遍性であろう。数学の命題は世界中のいかなる人間にとつてもなんらの差別なく理解できる。そういう普遍性をもっている。そのことは人間の知性が民族や習慣のちがいを超える共通性をもっていることにより証拠でもある。それは偏狭な民族主義や人種的偏見にたいするもつとも力づよい反証である。普遍性のもう一つの側面は数学という学問が全人類の協力によって創りだされたという事実である。近代に入ってから確かにヨーロッパ人の貢献がきわめて大きい、古代、中世においてはアジア人の功績に帰せられるものがきわめて大きいのである。とくに江戸時代の日本人の業績(和算)は同時代において第一級のものであった。

そういう意味では数学は全人類的な科学といってよい。このことは数学を教えるさい、いろいろの機会に生徒の注意をよび起こしておくことが望ましい。偏狭な人種差別もつとも無縁な科学が数学なのである。

² それに劣らず重要なのは数学の歴史性である。いうまでもなく、数学は天文学ともにもつとも古い科学であり、その確証をあげることとはできないが、学問としての数学は新石器時代の開始後まもなく発足したのではないかと思われる。つまり数学は他のあらゆる科学と同じく、天の一角から天下ってきたのではなく、人間と人間の集まりである社会によって歴史的に形成されたものである。

この歴史性ははじめにあげた普遍性と矛盾するかのように考える人もあるだろう。2 + 3はいついかなる時代にもまたどのような人にとつても答えは5になる。つまり時間と空間を超越した真理だから、歴史性などありえない、という主張もありうる。だが、この考えは一面的である。2 + 3という思考そのものが旧石器時代の人間にはできなかつたかも知れないし、また答えは同じ5でも途中の思考は異なることがあるし、またたし算の考え方そのものにもいろいろの解釈がありうる。答えが同じであるということは決して超時間、超空間的であることを意味しないのである。

数学が人間と社会とによる知的活動の歴史的産物であるとすれば、当然数学は孤立したものではなく、文化全体の有機的構成部分であって、文化の他の分野との緊密な連帯性をもつ。この連帯性は今日とくに強調しておく必要がある。なぜなら、数学は常に孤立する危険をそれ自身のなかに内包しているからである。とくにヒルベルトの『幾何学の基礎』（一八九九年）によって明確な形を与えられた現代数学にとつてはとくに重要なことである。

登場してきたはじめのころは「公理主義」とよばれていた現代数学は、内部矛盾をふくまない公理系を設定しさえすれば、それはもう一つの数学としての市民権を獲得するのだ、という性急な考えを広めたことは事実である。公理系が矛盾をふくまないことは必要条件であることはたしかである。矛盾があつたらお話にならないからである。しかしそれは十分条件であらうか。

ヒルベルトの『幾何学の基礎』はユークリッド幾何学のほかに無数の幾何学が存在しうることを示した。ではそれらの幾何学のなかでなぜユークリッド幾何学がもつとも早くから、しかも微に入り細にわたつて研究されたのであろうか。それはいうまでもなくユークリッド幾何学の空間が、実在の空間にもつとも近いからである。「公理主義」の浅薄な把握は、ある時期にはつまらない数学的構造を数学のなかに引き入れるという傾向を生みだしたことも事実である。

このことをブルバキにならつて建築術にたとえてみよう。ブルバキは数学的構造を建物にたとえたが、そうなれば公理系は設計図に当たるだろう。建築技師は力学の法則に従っているかぎり、どのような設計図を画くこともできるし、またその建物を建てることができるだろう。その点で彼は自由である。同様に数学者が論理の法則に従うかぎり、どのような公理系を設定しようと自由なのである。

しかし、彼らの設計した建物や数学的構造がよい建物か悪い建物か、よい数学的構造か悪い数学的構造かを判断することはできない。⁵それは次元のことなる問題なのである。よい建物か、悪い建物かの判断は力学の法則とは別の規準による。それはその建物が人間や社会とどうかかわり合うか、そのことがらを論じられるべきものである。建物を使うのはまさに人間であり社会だからである。

同じことが数学についてもいえる。数学は人間のためであるから、その逆ではない。一つの数学的構造は人間が自然や社会の法則を探究し、それによって自然や社会を人間のために造りかえていく上で、役に立てば立つほどよい数学的構造だということになるだろう。このような観点が抜け落ちてしまうと、数学は、ワイルのいうように、将棋のような知的遊戯の一種となってしまうだろう。

そうかといって近視眼的な実用主義をここで主張しているのではない。数学にかぎらず科学はたんに応用によって物質的な幸福を人間にもたらすために偉大なのではない。そのようなものはなくても、人間の視野を拡大し、不必要な恐怖心を取り除いてくれるという点でもまた偉大なのである。

数学は孤立した学問ではなく、他の学問文化との連帯のなかで発展してきた、ということには常に銘記しておく必要がある。その理由の一つは現代数学がそのような危険を内包していることにある。さらに第二の理由は日本の数学そのものの性格からくる。日本の数学にはとくに孤立化の傾向が強いからである。これは後進国の一般的傾向(アメリカ)でもあるが、日本の場合は「和魂洋才」とも関係がある。

そのことはわれわれが数学教育の建設運動をすすめていくうえで常に念頭におく必要がある。われわれの運動には多数の数学者が参加してくれることが望ましい。とくに現代数学の方法を教育にとり入れようとするばあい、研究の第一線で活動している数学者の思考方法から多くのことを学ばねばならない。だが、常にそうであるが、盲従は禁物である。とくに日本の場合、ある数学者が孤立主義に侵されているかどうか、いつでもチェックしておくだけの警戒心をもたねばならない。数学という学問の根本的性格の一つとして、「数学は学問的に孤立する危険を常に内包している」ということがいえるだろう。だからこそ、他の学問分野との連帯性を常に強調しておくことが大切なのである。

以上のことは、なにも高級な学問論論ではない。小学校の算数にも現にでてきている問題である。たとえば、近ごろの「集合ブーム」で集合でなければ夜もあけぬ有様だが、いろいろおかしなことが起こっていることも事実である。「集合」というのははじめからむずかしくてわからなかったが、いちどわかってしまうと、つまらないものだ。こんなものをなぜ先生はもつ

たいぶって教えるのかわからない」という子どもがたくさんでてきたという。子どもの批判はまったく正しいし、また、「集合ブーム」の欠陥をよく衝いている。

⁹ がんらい集合は現代数学の出発点ではあるが、決して到着点ではない。カントルの集合論そのものがそういう役割をもっていた。既存の構造をひとまず最小の原子にまで粉碎してみることがカントルの集合論のねらいであった。だからもし数学がカントルの集合論にとどまるなら、数学は砂漠のような荒涼たる学問になっただろう。だが、幸いなことに数学は集合論のところで停止しはしなかった。いちど原子にまで打ち砕かれた要素を、再び公理系によって結びつけ、多彩な構造をつくりだす方向に向かった。そういう意味で集合論は一度は必ず立ち帰るべき再出発点にすぎなかったのである。

数学教育でもまったく同じである。集合から量や論理、空間……というより豊富な世界に発展していかないかぎり、それは無意味なものであり、子どもたちを退屈がらせるだけのものになってしまう。

(遠山啓「数学は学問的に孤立する危険をもつ」)

〔注〕ヒルベルト：一八六二〜一九四三。二十世紀の数学の様々な分野に影響を与えたドイツの大数学者。ブルバキ：数学の「現代化」を推し進め大きな影響を与えた数学者グループ。ワイル：一八八五〜一九五五。二十世紀前半を代表する数学者の一人。カントル：一八四五〜一九一八。素朴集合論を創始した数学者。

問一 傍線部1「まず最初にあげるべきはその普遍性であろう」について、「普遍性」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 数学の命題は民族や習慣、さらには学問文化や歴史も超えて常に真であり、また数学研究への貢献も民族等にかかわらず全人類の規模で同時に行われるということ。

b 数学の内容は、民族等の違いを超えていかなる人間にも同様に理解され、数学への貢献も民族等の違いを超えて全人類の規模で行われてきたということ。

c 数学の問題に対する答えは常に一つであり、したがって数学の内容は他の学問文化や民族等に左右されない真理であるということ。

d 数学は全ての学問の基礎であり、また全宇宙を貫く真理を扱っているという意味で他の学問に対して優越性を持っているということ。

問二 傍線部2「それに劣らず重要なのは数学の歴史性である」について、「数学の歴史性」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 数学も他の学問と同様に文化の中で生じてきたものであり、したがってその内容もその社会の文化や歴史上の事実を直接的に反映したものにならざるを得ないということ。

b 数学はきわめて長い歴史を持つ学問であり、したがってどのような数学上の発見もそれにいたる歴史的経緯を考慮しないとその真偽は決定できないということ。

c 数学という学問が、天の一角から与えられたものではなく、人間の社会の中で他の科学・文化と複雑な相互作用を起しながら進展してきたものであるということ。

d 数学という学問は普遍的な命題のみから構成されており、時間と空間を超越した真理だけを扱う分野であるということが否定された、その歴史的事実。

問三 傍線部3と同じ内容を他の言い方で表すとしたらどう言えばよいか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 公理系が矛盾をふくまなければ、それだけでその公理系は数学としての市民権を獲得することになるのか。

b 矛盾を十分にふくまない公理系は、数学としての市民権を獲得できないのだろうか。

c 矛盾をふくんでいる公理系は、数学としての十分な市民権を獲得できないことになるのか。

d 数学としての市民権を獲得する公理系は、常に矛盾をふくんでいるわけではないのだろうか。

問四 傍線部4のように著者が言う理由として、次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a ユークリッド幾何学を用いれば様々な実際的应用が可能で大きな物質的幸福を人類にもたらすので、もっとも便利な幾何学として長い間研究されてきた。

b 学問文化の歴史的要因を考えると、ユークリッド幾何学は文化の他の分野と矛盾がないので、長い間にわたって、よい数学的構造とされてきた。

c ユークリッド幾何学の体系こそが、人間が実在の自然や社会を理解する上でもっとも役に立つ、よい数学的構造なので長い間にわたって研究されてきた。

d 数学の普遍性と歴史性を考えると、公理主義は浅薄な理解に基づく誤った考えであり、だからこそユークリッド幾何学だけが長い間にわたって詳しく研究されてきた。

問五 傍線部5はどういうことか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 力学の法則と論理の法則とは次元がことなり、したがって、設計された建物と構築された数学的構造の良し悪しを同一の次元で論じることができない。

b 力学の法則や論理の法則に従っているかぎり設計は自由であるが、出来上がった建物や数学的構造がどのような価値を持つかは、人間や社会との兼ね合いで決まる別種の問題である。

c 力学の法則と建築術の関係、あるいは論理法則と数学との関係は、次元がことなる問題であり、その良し悪しを同じ規準で決定することはできない。

d 力学の法則や論理の法則に従っているかぎり設計は自由であるが、出来上がった建物の価値を決める規準の次元は数学的構造の価値を決める規準とはことなる。

問六 傍線部6は何を意味しているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 数学は実用のための学問であり、この観点が抜け落ちてしまうと、それは日常生活に何も役に立たない一種のゲームになってしまう。

b ワイルが勧めるように、数学は人間による自然理解という観点を離れて、将棋のような知的遊戯の一種になるべきである。

c 建築術と数学を結びつけるという観点が抜け落ちてしまうと、数学は現実との接触を失い知的遊戯の一種になってしまう。

d 人間による自然の理解という観点が抜け落ちてしまうと、数学研究は自己目的化して一種のゲームの類たぐいに堕たしてしままう。

問七 傍線部7の「和魂洋才」とも関係がある」とは具体的にはどのような事態を指していると考えられるか。次の中から

もっとも適切なものを一つ選べ。

a 数学研究が西洋から日本に輸入されたとき、その技術的側面のみを取り出して輸入し、背後にある他の学問文化との歴史的関係を数学から切り離したこと。

b 数学の成果を西洋から輸入するにあたって、和算などの日本古来の伝統に固執して西洋数学の方法を全面的に拒否してしまったこと。

c 西洋数学の成果を日本に輸入したときに、日本人の数学者同士で研究を行い、西洋の数学者と共に研究を行うという態度が欠如していたこと。

d 西洋数学を日本社会に導入するにあたって、偏狭な民族主義ゆえに日本独自の数学を目指す傾向が強すぎて、学問的孤立主義に向かってしまったこと。

問八 なぜ著者は傍線部8のように言うのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 江戸時代の日本人の業績ゆえに、日本の数学者は数学が全人類の科学であることを軽視しがちであるから。
- b 偏狭な人種差別に対する反発が日本の数学者を孤立主義にはしらせる傾向があるから。
- c 西洋では数学が他の学問文化と連携して発展してきた歴史があるが、日本ではそれが軽視されてきたから。
- d 研究の第一線で活動している数学者にかぎって、単独での研究活動を好む孤立主義的傾向が強いから。

問九 傍線部9の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 集合論は、現代数学全ての基礎を提供するという意味で出発点であるが、それ自体は豊かな構造を持たず、数学的に豊かな構造を探究していく作業はそこから始まる。
- b 現代数学は集合論を出発点として始まったが、その後、様々な方向に拡散した結果、集合論を基礎としては豊かな構造を構築できないことがわかった。
- c 現代数学は集合論を出発点として始まり、集合論の中で完結することを目指したが、数学教育の観点から多彩な構造が必要であることがわかった。
- d 集合論は、現代数学がそこを出発点として始まったという意味で歴史的意義を持つが、すでに時代遅れになってしまっている。

問十 本文の趣旨に合致するものを、次の中から二つ選べ。

- a 数学という学問は公理系としての意義だけでなく、内容を兼ね備えた学問であり、その内容は、人間による自然や社会の理解を反映したものである。
- b 数学を砂漠のような荒涼たる学問にしないためには、建築や道路の建設のような応用面をもっと強化しなければならない。
- c 公理主義は孤立化を招きかねず誤っているので、数学は、その歴史性を重視してユークリッド幾何学のような古典に戻らなければならない。
- d 数学が全人類的科学であることは強調されるべきであるが、同時にその歴史性も十分に念頭において数学教育を進めていく必要がある。
- e 数学の普遍性と言われるものは、数学には豊かな民族的・文化的歴史性があるということによって、実は成立しないということがわかる。

二
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

わが身常に健ならず。寒暑共に苦しみ多し。かつて病褥にありてダンヌンチオの著作を読むや紙面に横溢する作家の意気甚だ豪壮なるを感じ、もし余にして彼の如き名篇を出さんとせば、芸術の信念を涵養するに先立ちてまづ猛烈なる精力を作り、暁明駿馬に鞭打つて山野を跋涉するの意気なくんばあらずと思ひ、続いて厩に駿馬を養ふ資力と、走るべき広漠たる平原なからざるべからざる事に心付きたり。これよりしてダンヌンチオの著作は余に取りてあたかも炎天の太陽を望むが如くなりぬ。

西洋近世の芸術は文学はいふも更なり、絵画彫刻音楽に至るまでまた昔日の如く広漠たる高遠の理想を云々せず概念の理論を排してひたすら活ける生命の泉を汲まんとす。信仰の動搖より来りし厭世懷疑の世は過ぎて、生命の力の發揮する処爰に深甚の歓喜と悲痛を求む。われ元より世界の思想に抗せんと欲するものに非ずといへども、わが現在の生活を以てしては彼のヴェルハアレンの詩に現れしが如き生命の力は時として余りに猛烈莊嚴に過ぐるを如何にせん。西洋近代思潮は昔日の如くわれを昂奮刺戟せしむるに先立ちて徒に現在のわれを嫌悪せしめ絶望せしむ。われは決して華々しく猛進奮闘する人を忌むに非らず。われは唯自らおのれを省みて心ならずも暗く淋しき日を送りつつしかも騒し氣に嘆かず憤らず悠々として天分に安んぜんとする中国の隱者の如きを崇拜すといふのみ。ここにおいて江戸時代とまた中国の文学美術とは無限の慰安を感じしむるに至れり。これらの事われ既に幾度かわが浮世絵論の中に述ぶる所ありき。

我は今、わが體質とわが境遇とわが感情とに最も親密なるべき芸術を求めんとしつつあり。現代日本の政治並びに社会一般の事象を度外視したる世界に遊ばん事を欲せり。社会の表面に活動せざる無業の人、または公人としての義務を終へて隠退せる老人等の生活に興味を移さんとす。墻壁によりて車馬往來の街路と隔離したる庭園の花鳥を見て憂苦の情を忘れんとす。人生は常に二面を有すること天に日月あり時に昼夜あるが如し。活動と進歩の外に静安と休息もまた人生の一面ならずや。われは主張の芸術を捨てて趣味の芸術に赴かんとす。われは現時文壇の趨勢を顧慮せず、国の東西を問はず時の古今を論ぜず唯

最もわれに近きものを求めてここに安ぜん^{やすん}と欲するものなり。伊太利^{イタリヤ}亜未^{アム}来^ク派^パの詩人マリネツチが著述は兩三年前^{せえん}われも既にその声名^{しょうめい}を伝^{つた}聞^ききて一読^{いつとく}したる事ありき。然れどもその説く所の人生^{じんせい}鷲^{じゆ}進^{しん}の意気^{いけ}余りに豪壯^{ごうさう}に過ぐるを以てわれは忽ち^{たちまち}これを捨てて顧みざりき。われは戦場に功名^{こうめい}の死をなす勇者^{ゆうや}の覚悟^{かくご}よりも、家に残りて孤兒^{こじ}を養育^{やしよく}する老母^{らうぼ}と淋しき暖炉^{だんろ}の火を焚^たく老翁^{らうおう}の心をば、更に哀れと思へばなり。世を罵^{のの}りて憤死^{ふんじ}するものよりも、心ならず世に従^{したが}ひ行くものの胸中に一層^{いちじやう}の同情^{どうじやう}なくんばあらず。

6 世に立つは苦しかりけり腰屏風^{こしびやうぶ}

まがりなりには折りががめども

8 われ京伝^{きやうでん}が描ける『狂歌五十人一首』の中^{うち}に掲げられしこの一首を見しより、始めて狂歌捨てがたしと思へり。

されど我は人に向つて狂歌を吟ぜよ浮世絵を描け三味線を聴けと主張するものに非らず。われは唯西洋の文芸美術にあらざるもなほ時としてわが情懷^{じやうわい}を託するに足るものあるべきを思ひ、故国の文芸中よりわが現在の詩情^{うたじか}を動し得るものを発見せんと勉むるのみ。文学者の事業は強ひて文壇一般の風潮と一致する事を要せず。元^{もと}これ營利の商業に非らざればなり。一代の流行西洋を迎ふるの時に当り、文学美術もまた師範を西洋に則^{のっと}れば世人に喜ばるる事火を見るより明かなり。然れども余はさほどに自由を欲せざるになほ革命を称^{とな}へ、さほどに幽玄の空想^{くうさう}なきに類^{たう}に泰西の音楽を説き、さほどに知識の要求⁹を感ぜざるに漫^{みた}りに西洋哲学の新論を主張し、あるひはまたさほどに生命の活力^{くわつりき}なきに徒に未來派の美術を迎ふるが如き怪拳⁹を恥づ。いはんや無用なる新用語を作り、文芸の批評を以て宛^{まが}ら新聞紙の言論が殊更^{ことごと}問題を提出して人氣を博するが如き機敏⁹をのみ事とするにおいてをや。

10 われは今自ら退きて進取の氣運に遠ざからんとす。幸ひにわが戯作者^{げさくしや}氣質^{かたぎ}をしていはゆる現代文壇の急進者より排斥嫌惡せらるる事を得ば本懐の至りなり。

(永井荷風「矢立のちび筆」)

〈注〉 病褥：病床。 ダンヌンチオ：一八六三～一九三八。イタリアの作家。 涵養：じつくりと養い育てること。

暁明：明け方。 ヴェルハアレン：一八五五～一九一六。ベルギーの詩人。 墻壁：仕切りの壁。

京伝：山東京伝。一七六一～一八一六。戯作者。 泰西：西洋。

問一 傍線部1には、筆者のどういう心情が表れているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 巨大な足跡に思いをはせている感じ。
- b 気迫の充実に敬意を表している感じ。
- c 華麗な文業にあこがれている感じ。
- d 強烈な力に圧倒されている感じ。

問二 傍線部2について、筆者は「西洋近世の芸術」をどのような芸術と見ているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 理想の高さを追求する芸術。
- b 生命の力に充ちあふれた芸術。
- c 厭世や懐疑を超越した芸術。
- d 歓喜と悲痛を表現した芸術。

問三 傍線部3について、筆者の「現在の生活」の状態を示すものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 身体が弱く、夏も冬もつらい状態。
- b 強い刺激に興奮している状態。
- c 心身ともに気迫がみなぎっている状態。
- d 内省を重ねて、心の平静をとりもどしている状態。

問四 傍線部4について、筆者が求める「わが体質とわが境遇とわが感情とに最も親密なるべき芸術」とはどのような芸術か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人生の相反する二面を表現する芸術。
- b 政治や社会の動向に目を配る芸術。
- c 人生や生活の役に立つ芸術。
- d 政治や社会を問題にしない芸術。

問五 傍線部5「心ならず世に従ひ行くもの」に該当するものを、次の中から一つ選べ。

- a 戦場に功名の死をなす勇者。
- b 家に残って孤児を養育する老母。
- c 人生驀進の意気を説く者。
- d 世を罵って憤死する者。

問六 傍線部6の狂歌はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 世に立つのは苦しいことだが、腰屏風のように小さな姿勢で生きてゆけばまがりなりにも暮らしてゆけるのだ。
- b 世に立つのは苦しいので、腰屏風のように低い姿勢で対処してゆくと世の荒波を防いで生きてゆけるのである。
- c 腰までの高さの屏風は身をかがめて立つには立っているが、その腰屏風のように世に立つのはつらいことだ。
- d 腰までの高さの屏風は身をかがめているが、それはそれで苦しいなりに世に立っていることなのである。

問七 傍線部7について、筆者はなぜ「この一首」を見て「狂歌捨てがたし」と思ったと考えられるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a この狂歌の中に、心ならずも世の中と折り合って生きる者の苦しみを見たから。
- b この狂歌の中に、世の中で静かに心の平安を保ちつつ生きてゆく方法を発見したから。
- c この狂歌の中に、世の中の苦しさに打ちのめされつつもそれを克服してゆく人の姿を見たから。
- d この狂歌の中に、苦しい世の中で生きることがそのまま風流につながることを発見したから。

問八 傍線部8について、筆者は「我は人に向つて狂歌を吟ぜよ浮世絵を描け三味線を聴けと主張するものに非らず」と言うが、ではどのようにするのだろうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 西洋の文芸の持つ詩情を汲みとるようにする。
- b 日本の文芸から今の詩情を刺激するものを見つけようとする。
- c 西洋の文芸を理想のものとして追求してゆく。
- d 日本の文芸と西洋の文芸との調和を心がけてゆく。

問九 傍線部9について、ここで言う「軽拳」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 文学者が、文壇一般の風潮に適合するように作品を制作してゆくこと。
- b 営利の目的のために、文学者が自己を投企してゆくこと。
- c 文学者が心の底から欲することなしに、西洋の思想や芸術をよしとして主張すること。
- d 幽玄の何たるかを理解することができないのに、日本の文学に固執していること。

問十 傍線部10について、筆者が「本懐の至りなり」と考える理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 進取の気運に富む文学者から嫌われることは、自分の懐古趣味が正当性を認められていることになるから。
- b 文壇の最前線にいる文学者から嫌われることは、文壇に背を向けている自分の文学の新しさが逆に証明されていることになるから。
- c 新しい文学を求める文学者から嫌われることは、自分の日本文学に対する擁護が認められていることになるから。
- d 西洋を範とする文学者から嫌われることは、現在の気運から遠ざかる自分の意志がよりはつきりと伝わっていることになるから。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

例えば「鳥」という概念を考えよう。「鳥」という概念とは何か。これに対する一つの答えは、それは鳥たちの集合だということである。「鳥」という概念を満たすものの集合は「鳥」の外延と言われる。あるいは、「鳥」の概念とは鳥たちの集合を規定するような諸特徴だという答え方もある。そのような、ある外延を規定する特徴は内包と言われる。このように外延や内包によって概念の内実を捉えようとする考え方は、「古典的概念観」と呼べるだろう。

古典的概念観に従って「鳥」という概念を外延的に捉えるとき、その集合には「鳥」と呼ばれるありとあらゆるものが属している。その中には、ダチョウやペンギンのような、いささか鳥らしからぬ鳥も含まれることになる。他方、「ああ人は昔々、鳥だったのかもしれないね。こんなにも、こんなにも、空が恋しい」(中島みゆき作詞)などと歌い上げるとき、誰もダチョウやペンギンのことは考えていない。

われわれの概念理解には、たんに鳥の集合を規定できる、すなわち鳥と鳥ではないものとを弁別できるというだけではなく、どういう鳥が典型的な鳥らしい鳥であり、どういう鳥が例外的な鳥らしからぬ鳥なのかという了解も含まれているように思われる。そこで認知意味論は、そうした典型例を「プロトタイプ」と呼び、古典的概念観に反して、ある概念をもっていることの核心をその概念のプロトタイプを把握していることに見るのである。

このようなプロトタイプを重視する考え方に立つとき、二人の人が同じものを同じように「鳥」と呼んだとしても、つまり、その外延の規定は同じであったとしても、何を典型例とするかによってその概念内容は異なりうることになる。例えば、私の場合には、アヒルよりはカラスの方がより鳥のプロトタイプに近いと考えているが、アヒルの方がカラスよりも鳥のプロトタイプに近いと考える人たちもいるかもしれない。その場合には、その分、「鳥」という概念も異なっていると言わなければならない。想像しにくいかもしれないが、極端な場合を考えるとすれば、ペンギンこそ鳥のプロトタイプであり、カラスを見たときに「変な鳥！」などと言う人たちがいたとして、その人たちはわれわれとはかなり異なった「鳥」概念をもっていると言えるだろう。

あるいは、同じ言葉を同じ外延に対して使用していても、時代によってそのプロトタイプが異なるために、その概念は変化したと言わなければならないと思われる。例えば、「男」「男」と呼ばれる対象は昔も今も変わりはない。しかし、男のプロトタイプ、典型的な男とされる対象は、ずいぶん変化した。そしてそれはつまり、「男」の概念が昔と今とで変わったということである。

こうした考え方は、もうひとつの非常に重要な帰結をもっている。「鳥」という概念と「空を飛ぶ」という属性の関係を考えよう。もし「空を飛ぶ」ということが「鳥」という概念に含まれるのだとすると、「空を飛ぶ」という表現は論理的に矛盾していることになる。だが、「空を飛ぶ」という表現は決して矛盾ではない。それゆえ「鳥」という概念には「空を飛ぶ」という属性は含まれていないと考えられる。実際、空を飛ぶものとして鳥の集合を規定したならば、ダチョウやペンギンは鳥の集合からは排除されてしまうことになる。それゆえ、「空を飛ぶ」という特徴は「鳥」の内包には含まれないとされねばならない。つまり、⁴古典的概念観のもとでは、「空を飛ぶ」という属性は「鳥」の意味には関わってこないのである。

だが、プロトタイプという考え方に従うならば、「ふつうの鳥は空を飛ぶ」という命題は鳥のプロトタイプについての記述であり、「鳥」の意味に関わるものとなる。先に引用した歌詞などは、まさにこうした鳥のプロトタイプ理解を利用したものにはかならない。こうして、「鳥」という語の意味、鳥の概念の内に、典型的な鳥についてのさまざまな事実が入り込んでくることになる。⁵これは、プロトタイプという考え方の重要な帰結である。

だが、どのような事実でも意味の内に入り込むというわけではない。例えば、カラスは鳥のプロトタイプに属すと言えるが、だからといってカラスについての事実がすべて「鳥」という概念の内に含まれるなどということはない。カラスは紫外線領域を感じとる視細胞をもっているらしいが、そんなことは「鳥」という概念はもちろん、「カラス」の概念の内にも、含まれてはいない。では、どのような事実が概念の内に含まれ、どのような事実が含まれないのだろうか。この問いは、つまるところ、「プロトタイプ」とは何なのか、という問いにほかならない。

例えば、^{二すえ}梢でカーと鳴いているあのカラス、あれは鳥のプロトタイプだろうか。これはなかなか微妙な問題である。

なるほどカラスは鳥のプロトタイプである。だが、梢でカーと鳴いているあれは、鳥のプロトタイプではない。あのカラスは、あのカラスなりの個性を何かもっているだろう。それに対して、プロトタイプはいつさいの個性をもたない。プロトタイプとは、現実存在するものではなく、いわば概念的に構成された抽象的なものである。

あるいは、もつと平たい言い方をするならば、鳥のプロトタイプとは現実存在する鳥ではなく、われわれの通念上の鳥なのである。つまり、ふつうの鳥について語られるふつうの事柄——羽と嘴くちばしをもち、空を飛び、卵を産み、鳴き、ある鳥は水面を泳ぎ、ある鳥は渡りを行い、ペットとして飼われているものもあるし、あるいは人間の食用にされるものもある、等々の全体である。そこでは、紫外線を感じる視細胞の有無などは、まったく触れられていない。

そこで私は、プロトタイプに関わるわれわれのもつ通念を、「典型的な物語」と呼ぶことにしたい。そして、それこそがプロトタイプという言葉で捉えられるべきものであると言いたい。ある概念を理解するとは、その概念のもとに開ける典型的な物語を理解することなのである。

(野矢茂樹「語りえぬものを語る」)

問一 傍線部1の問いかけについて、古典的概念観による捉え方として適切ではないものを次の中から一つ選べ。

- a 鳥の概念の内実は、われわれが「鳥」だと思っているものに帰属させる通念である。
- b 鳥の概念の内実は、われわれが「鳥」とよんでいるすべての対象の全体である。
- c 鳥の概念の内実は、「鳥」とよばれているもの全体に共通な属性のことである。
- d 鳥の概念の内実は、われわれが典型的だと思っている「鳥」の概念には基づかない。

問一 傍線部2について、「誰もダチョウやペンギンのことは考えていない」のはなぜか、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 古典的概念観における外延ではなく内包によって考えているから。
- b 古典的概念観における内包ではなく外延によって考えているから。
- c 古典的概念観における外延と内包とによって考えているから。
- d 古典的概念観における外延や内包によっては考えていないから。

問二 傍線部3について、「かなり異なった」とはどのように異なっているのか、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a プロトタイプが把握されているのに、概念の内容が異なっている。
- b 何を典型例とするかが異なるために、概念が変化してしまっている。
- c プロトタイプの設定が異なるために、概念の内包が異なっている。
- d 概念の外延は同じだが、プロトタイプの設定の仕方が異なっている。

問三 傍線部4の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「空を飛ぶ」という特徴は、「鳥」についての外延にしか入っていない。
- b 「空を飛ぶ」という特徴は、「鳥」についての内包にしか関わっていない。
- c 「空を飛ぶ」という特徴は、「鳥」についての概念の内実には入っていない。
- d 「空を飛ぶ」という特徴は、「鳥」についての古典的概念観には関わらない。

問五 傍線部5における「重要な帰結」の説明として、適切ではないものを次の中から一つ選べ。

- a 概念の外延が同じであっても、場合によってはその内包の意味が異なることがある。
- b 概念の内包ではなく、その概念で考えられている典型的事実によって内容が異なる。
- c 概念の内容把握のためには、認知意味論的な理解の仕方が不可欠なものとなってくる。
- d 概念の意味を理解するためには、その概念のプロトタイプを把握しなければならない。

問六 傍線部6のように主張する理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「梢でカーと鳴いているあのカラス」という事実は、プロトタイプ概念には含まれないような種類の事実であるから。
- b 「梢でカーと鳴いているあのカラス」には、ある特定の事実のみが含まれており、他の事実は問題とされていないから。
- c 「梢でカーと鳴いているあのカラス」という個別の具体的な事実は、そのままではわれわれの一般的通念ではないから。
- d 「梢でカーと鳴いているあのカラス」という個性的な現実の存在は、概念的に構成されることができないものであるから。

問七 傍線部7の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a その概念の内容が、事実から抽象的に構成されてきた一般的な通念であることを理解することである。
- b その概念を、どのような事実を通じてわれわれが知るに至ったかという過程から理解することである。
- c その概念がプロトタイプとして理解されるに至った理由を、抽象的な典型例から把握することである。
- d その概念について、われわれが通念として持っている一般的理解の観点から内容把握することである。

